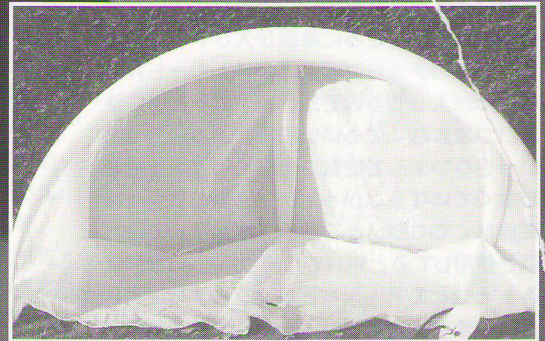


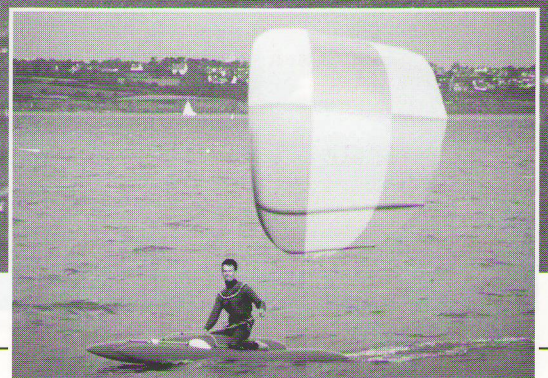
THE HISTORY of KITEBOARDING

構成文: 赤土 正剛



カイトボードの歴史

この企画を編集部から持ちかけられたとき軽い気持ちで引き受けたのが失敗の元とさえ考えたのが以前Vol3.に書いたGorgeのカイトスキーの事、それから言わずと知れたインフレーターカイトの発明者Brunoの事だった。正確を期するために世界中につまりロシア、アルゼンチン、南アフリカに至るまで質問のメールを送ったのだ。その結果ヨーロッパ勢からはフランス人つまりBruno Legaignoxであるとの返信がありアメリカ勢からはCory Roeselerとの返信であった。その結果最終的にRod Parmental(ビデオ製作者、Gorge在住“How to Rip”“How to Rip Harder”“BreakingWind”で有名、以前赤土はラスベガスと一緒に寿司を食べに行き5人で\$800以上になってしまい割り勘のときVol3.で紹介したBobがRodにテーブルの下でお金を渡していた。)を通してCoryに連絡がついた。そのやりとりの中で面白い事実が浮き上がってきた。これに対してBrunoからの訂正文が入り込み極力公平に並べると次のようになった。ただしこの記述の中でこんがらがるのはCoryはカイトスキーと言い、Manuはカイトサーフィン、BrunoはフライサーフィンとしてLue Wainmanはカイトボーディングと呼んでいることである。まあそれぞれのバックグラウンドを見ればそれぞれの呼び方もわかるような気もするBrunoはどうしてフライサーフィンと呼び始めたかは分からないが、Coryはウエスタンオールスターカレッジ氷上スキーチームのキャプテンであり、Manuはプロウィンドサーファーであり、Lueは20歳前半にウエークボードのコンペティターであった。なんとなくそれぞれのスタイルが呼び名に出ている。





1750年代 Ben Franklinがカイトを使用して泳ぐのを助けると雑誌に記述。

18世紀 英国人のGeorge Pocockが馬車をカイト引く事を提言、特許取得し実際にプロモーションと販売を行う。

1903年 11月7日 Samul Flanklin Cody氏がカナーとカイトを使いフランスのCalaisからイギリスのDoverまでのドーバー海峡を横断。

1971年 Hagedoorn教授がパラfoilカイトとハイドロfoilカイトで人間の水上輸送を提言。

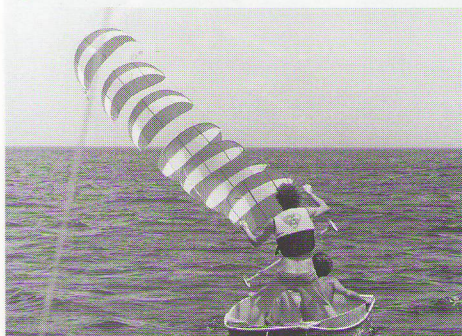
1972年 Andrew JonesとRay MerryがFlexi-Foilパワーカイトを開発。

1979年 Billy Roeseler(Coryの父)とNelson Funtonが10ノットの風で40ノットのスピードでカイトのような効率の良いハイドロfoilのセールがあれば可能であると論文を発表。(ただこの時、既にウィンドサーフィンがそれに近いスピードで走っていた)。

1982年 Billyが“Javob's Ladder”という21フィートのトルネード型カタマランの改造艇に巨大なFlexi-foiを使いミッドサイズBクラスの世界記録25ノットを樹立。

1982年夏 Billyは12歳のCoryを18フィートのホビークャットの後ろにシングルの上スキーに乗せて引く張る。

1984年 BillyはJobeの“Sky Sail”ハンングラ



1984年

イダーを改良したものをCoryにテストさせる。ホビークャットの半分引きずられ後は強力なパワーの為吹き飛ばされる。

BrunoとDominieueがボードとボート用のセールとして効率的なカイトの開発を始める。たかさんのプロトタイプを作り小さなボートからウィンドサーフィンまでテストし現在カイト用として使用しているインフレーターカイトを特許申請する。ちょうどこの頃マウイ島でLaird HamiltonとMike WaltzがITVセールで作られたPARAPET-TYPEカイトでカイトをやり始めた。その後Emanuel“Manu”Bertinにカイトを教えた。この時ManuがLairdの土地で自分をカイトに繋ぎ尚且つLairdのトラックに繋ぎ止めてカイトを上げていたときカイトがクラッシュしてMike Waltzのトラックの上に落ちこちたという逸話がある。

1985年

3月 Brunoが2つのスピードセーリング競技会でカイトと水上スキーを使用し今までの記録を17ノット上回りメディアに取り上げられる。

1986年

BillyとCoryとその友人が37mのカイトをホビー18のリグを2つ使いテストする。この17mの長さのカイトは二人で操縦し30回トライしたが成功したり成功しなかったりこの友人が怪我をした事でプロジェクトはボツ。

1987年

Troy Navarroがマウイ島でスカッファーとFlexi-Foilでカイトサーフィン始める。同じ頃ニュージーランドのPeter LynnとスイスのTheo Schmidtがそれぞれ個別にカイトサーフィンを始め道具の開発を進める。ただBrunoによるとShmidtはAndreas Kuhnと一緒にやっておりKuhnは1986年かそれ以前にメディアに取り上げられているらしい。またそのとき既にカイトボードをやっており、弱い風で高いジャンプもやっていたらしい。そしてパラグライダーとスペシャルコントロールバーを使っていたらしい。

1987年

12月

Billyが2ラインスタントカイトの飛ばし方を習いCoryに教える。そしてシアトルの近くのJuan de FucaのStraightsというところで初めてカイトスキーを試みオフショアで下ってしまい帰れなくなる。この年Brunoに特許の認可が降りる。

1988年

5月

Coryがカイトスキーヤーとして初めてのウィンドサーフィンのレースに出場。この“Celilo cup”でコロンビア川に架かる橋をくぐらなければならない、10マイル地点まで5位に着いていたが敢え無くリタイア。(赤土もこの大会に出場したことがあるがマークブイはスタートと中間1箇所そしてゴールしかない。10マイル地点はほぼ全コースの三分の一の地点でその直後に橋が架かっている。またフィニッシュの直前、Celilo島のすぐ東にも橋があ

る。私が見たときは1995年7月には見事にカイトで橋を潜り抜けていた。)

1988年 8月

Coryがイギリスのウエイマスで行われたスピードウィークでFlexi-FoilとJobeのジャンパースキーで12ノットの風の中19.89ノットを出して10mクラスで優勝

1989年

Dave CalpとBillyがスタンフォード大学で行われた“Sail Tech ‘89”で“昔の道具からカイトスキーまで”の演目で講演。

1989年 7月

CoryがGorge Blowoutで190名のウィンドサーファーの中カイトで56分のコースレコードを樹立する。ちなみにこのレースは20マイルをひたすらCascade LocksからHood Riverまで風下にかつとぶレスで結構厳しい。ただCoryはそう言っていないがWindtrack JournalのClay Feeterによるとこれはウィンドサーフィンのレースであった為正式なエントリーでは無かつたらしい。

1992年4月 4月

Kite Ski Inc.がBilly,Cory,Wayne Pattersonによって設立される。

1992年 11月

Coryが初めてウォータースタートに成功。ちなみに彼のカイトはフレームカイトである。彼は最初のうちラムエアカイトを使用していたのだが落とすと水でいっぱいになる。ラムエアに嫌気がさし(スタントカイトのような)フレームカイトにしていた。リール付きのバーでカイトを引き寄せウォータースタートをする訳である。それまでは伴走船にカイトを上げてもらっていたようである、ちなみにこのバーはディスクブレーキ付きである。

1992年 12月

最初のKite SkiがAllan Rodrickに販売される。

1994年 9月

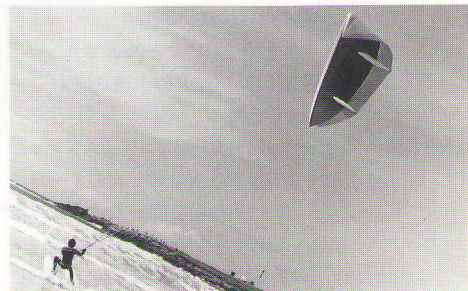
ドイツのThomas Jeltschがラインプロテクターを開発しリール式コントロールバーを安全にした。またCoryがウエークボードを履いて最初のバックループに成功、同時期エアチェア-の発明者であるMike MurphyがCoryの操るカイトスキーの後ろに引かれてバックフリップに成功。またこの月CoryとBillyのカイトスキーの特許が認められる。

1995年 6月27日 ~30日

ESPN Exreme Gamesで公式競技ではないものの世界中からWipicaのBruno Legaigoux,Sky TigerのTroy NavarroそしてCory Roeselerなどの12名を集め行われCoryが優勝。

1995年 7月

サンフランシスコ湾3rd Avenueで第一回カイトスキーの世界選手権が開催





される。これをオーガナイズしたのがヨットの505クラスでの経験をもつEric Steinbronerであった。この年Brunoがマウイ島でManuと出会う。そしてBrunoをニールプライドのデザイナーであったBarry Spanierにひきあわせた。

1996年 第二回カイトスキー世界選手権が同じ場所で同じオーガナイザーで行われる。

1996年 12月 日本のハイウィンド誌にカイトサーフィンが紹介される。

1997年 第三回はカイトサーフィンワールドチャンピオンシップと名前を変更しKass Bargstromのオーガナイズでマウイ島のノースショアに場所を移して行われる。この時の模様がFox Sports Networkで放映される。すでにインターナショナルパテントを取得していたBrunoはニールプライドの工場で作成したプロダクションカイトを作成しWIPIKA(Wind Powered Inflatable Kite Aircraft)というブランド名で販売を始める。そして日本人で初めてネット上でおなじみの沖縄の比嘉氏がこのカイトの5.0と8.5を7月に購入し3ヶ月間ボードが無い事もありボディードラッグをやっていたとの事である。この直後にK-FUNKの小西氏がハワイでカイトを習ってくる。

1998年 第四回カイトサーフィンワールドチャンピオンシップがJoe Koehlのオーガナイズでマウイ島で行われる。この年Manuのビッグウェーブでのライディングがヨーロッパの雑誌で取り上げられ

始める。ただこの年の10月の段階でLaird,Waltz,Rush,Cabrinha,Robby,Sierra,Montagueは非常に興味を見せていたが、まだカイトサーフィンを始めるにはいたっていなかった。この年の9月赤土はフロリダのSurf ExpoでWIPIKAのブースを訪れその輸入をしようと思うが、赤土を相手した変なしゃべり方をするチビツ、今から思うとLou Wainmanがちゃんとして話をしなかったのかそれともその気が無かったのか連絡が来ずにインターテックディベロップジャパンの中西氏に日本の輸入代理店が任される。そして井上氏が今のJKBAの前身となるJKSAを立ち上げ中西氏の指導を受けた丸森氏、大島氏がカイトサーフィンを各地に広げ始める。

1999年 4月 Valerie Sallesがオーガナイズしてルノーがスポンサードした“Mondial du Vent”にマウイ、ゴージ、ヨーロッパからトップカイトボーダーを集めフランスのLeucateで行われる。他の選手がディレクショナルボードを使う中Lou Wainmanがジミールイスのシェーブしたウェークボードを使い優勝しウェークボードスタイル、ツインチップスタイルがファッションブルになる。F.ONEのRafael Sallesがフィギュアエイトでラムエアカイトとサーフボードタイプで優勝する。

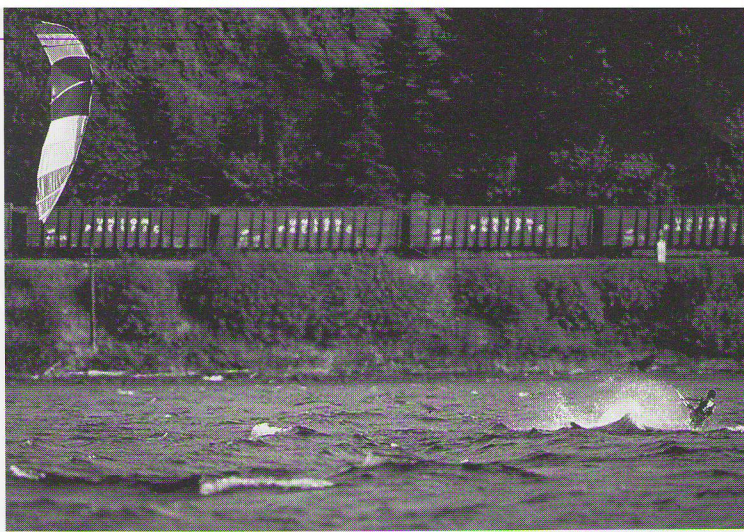
1999年 5月 モロッコでアフリカ大陸で初めてのワールドカップがフランスのオーガナイザーによって行われる。Flash Austinがフラットウォーターフリースタイル、ウェーブ

フリースタイル、ダウンウィンドレース、島の一周レース、そしてボウダークロスの全てに優勝する。この年の秋Naishが自社ブランドのカイトの販売を始める。また日本でも販売を始める。

2000年 Flash AustinとMax BoがNaishカイトを使用し殆どのビッグエアコンテストで優勝する。WipicaのChristopher TastiがRioのワールドカップでチャンピオンに輝く。

2000年 7月 CoryとFlashがGorge Blow-outでワイントゥーフィニッシュを飾る。記録は53分と54分で最初のウィンドサーファーは10分遅れであった。この年、中西氏





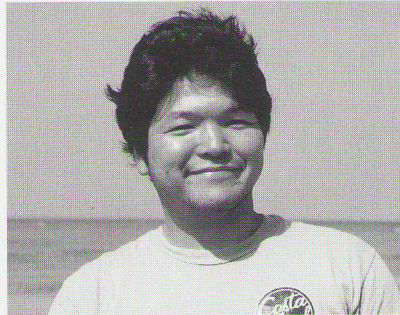
の会社が倒産し協会は自然解散となるが、佐藤氏が音頭を取りJKBAとして再スタートする。

2001年 Cabrinha, Slingshot, North, Liquid Force, Flexi-foilがインフレーターブルカイトの特許使用権を取得し販売を開始する。Wipicaが逆さまの状態からリランチ出来るインフレーターブル4ラインカイトを発表する。

2001年 7月 ウェークボードビンディング、ラムエアークイトはGorge Gamesのファイナリスト4人には誰もいなくなる。全員が4ラインインフレーターブルカイトとフットストラップであった。この年BrunoがWipicaを離れBic SportsとTakoonを立ち上げる。

2001年 10月 始めての全日本選手権が千葉の九十九里にて行われる。

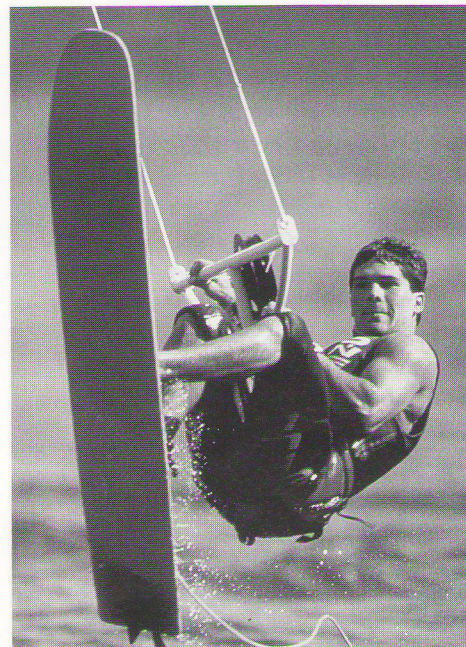
2002年 1月 GaastraがCoryデザインでカイトを発表、ただBrunolはGaastraに特許の使用申請をしてもらいたいとの事である。Gaastraは自分たちのカイトはBrunoの特許の範囲外であると主張しているが、赤土もその特許のコピーを読ませてもらった限りどうかと思う。Gaastraの社長のDavid Lowさんもなかなか商売にきつい人なので大変である。ところで彼のいびきはこの世の物とは思えない。以前展示会で一緒に部屋に泊まったことがあるがまったく寝れない位であった。その後初めて行ったドイツでも毎晩彼らと中華料理を食べに行きついに一度もドイツ料理を食べる事は無かった。考えてみると今でも悔しい。

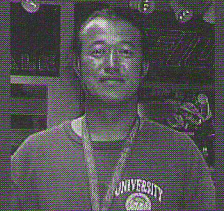


沖縄の比嘉氏
日本で最も早くからカイトを始めた一人。78Pでも紹介した彼のWEBサイトはカイトに関する情報満載で有名だ。



大阪 K-FUNK小西氏(左)
日本で最も早くから本格的にKITEのスクーリングを行った一人だ。右となりは俳優の岩城晃一氏。





赤土 正剛

(あかどせいご)

PROFILE
1959年2月9日生まれみずがめ座のO型
身長186cm 体重95kg
白峰温泉スノーボードスクール校長、日本スノーボード協会本部役員。日本赤十字救急指導員。SLING SHOTの輸入代理(有)レゼール代表。カイト歴 2年。元ウインドサーフィン ワールドカップ選手。(現在もしぶとく国内プロサーキットに出場)初めてカイトでジャンプしたら、以前マウイ島でウインドの練習していたときにマストハイの波で思いっきり飛んだよりも高く飛べて(多分高さ6mくらい)それ以来めっちゃくちゃカイトにはまっている。

この企画にあたり非常に大勢の方の協力を得る事が出来非常に感謝している。Coryはカイトのデザイナーである反面、Hood Technology Co.という会社の宇宙工学のエンジニアである。BrunolはTakoonのデザイナーであり、比嘉さんは沖縄の航空管制官である。またエアーズカイトの村上さんにもいろいろな資料をいただき、本当に助けられた。

このカイトサーフィンというスポーツは随分昔からいろんな人のいろんなアイデアが入り込みそれが世界的規模で進化していく。その当時のトレンドなスポーツは流行りそして廃りまったくの垂流であったものが主流のものに変わった形で主流になっていく。まるでネグロイドからモンゴロイド、コーカソイドに枝分かれし古モンゴロイドと新モンゴロイドが時を隔てて混ざり合い日本人を作ってきたようにその進化はとどまるどころを知らない。(四国の堀上君に至ってはウインドサーフィンはカイトサーフィンにいたるまでの進化の過程とまで言い切ってしまう。赤土は怖くてと言えん。)また近年になってインターネットの発達が距離的な枠を取り払いさらにこのスポーツを加速させていく。本当のカイトの歴史は今始まったばかり。このスポーツにこの時期から携わるのは非常に幸運なことなのかもしれない。